『敦煌寫本研究年報』第十六號（2022.03）83–96 頁

「頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔生天因緣變」初探*

A Preliminary Study of *Illustrative Narrative of the Palace Lady of Bimbisāra's Queen who is reborn in Heaven from the merit of making offerings to a Stūpa.*

髙井龍

はじめに

敦煌文獻には、韻文と散文を交互に繰り返す講唱體によって書かれた一群の文獻がある。講唱體文獻は、繪解きに由來する變文、緣や因緣や緣起等の名が冠された緣起類、佛教經典等を講釋する臺本の講經文の三つに分類される。その中でも、變文は、中國通俗文學史の理解に重要な資料であるとされ、敦煌文獻研究の早期から多くの識者に着目されてきた。しかし、變文の一つ「頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔生天因緣變」は、敦煌文學文獻に攜わる研究者に良く知られた資料であるにも關わらず、他の有名な「目連變文」や「伍子胥變文」や「舜子變文」のような研究の蓄積はない[1]。その主要原因としては、現存する二點の寫本（前半部分を記したS.3491V（後缺）と後半部分を記したP.3051（前缺））を併せても中間部分に缺損があり、完全な復元ができないことが擧げられる。また、「因緣變」という珍しい名稱を有しており、緣起類であるとも變文であるとも見做し得るため、資料の位置付けに困難を伴うことも原因の一つであるだろう。しかし、卑見によれば、中間部分に缺損があるとはいえ、S.3491VとP.3051に殘る幾つかの特

*本稿は、「2021年中國中世寫本研究夏季大會」（2021年9月12日、Zoom開催、主催：大手前大學）における發表原稿「「功德意因緣變」と講經」に加筆修正を施したものである。また2019年8月には、大英圖書館における寫本調査にあたり、謝函霖氏の便宜を得た。ここに謝意を表す。

[1]「目連變文」の寫本には、S.2614V、S.3704、P.2319、P.3107、P.3485、P.4044、P.4988V＋羽19V、BD00876V、BD04085＋BD03789、石谷風舊藏本69＋70＋71、羽71がある。「伍子胥變文」の寫本には、S.328、S.6331、P.2794V、P.3213Vがある。「舜子變文」の寫本には、S.4654、P.2721V、羽39がある。

徴は、變文の發展を理解するにあたって重要な知見を我々に提供してくれるものである。本稿では、第一に從來具體的な考察のなかった題目について考察を進め、變文文獻として位置付けることの妥當性と、そこに併せ考えておくべき問題を明らかにする。そして、兩寫本の内容を、その依據典籍である『撰集百緣經』卷第六「功德意供養塔生天緣」と比較考察し、兩寫本間の相違や他の變文や緣起類と異なる點を明らかにし、文獻の作成者について小考を附す。次に、内容の考察へと進み、二點の寫本には現存しない缺損部分が當該故事の中心であることの問題を考えるとともに、當該故事に國王が取り上げられることの問題や、他の變文や緣起類との關係を考察する。以上より、當該故事の十世紀敦煌における位置付けについて、新たな理解を提供することを目指す。なお、筆者は敦煌講唱體文獻の書寫年代を、識語や寫本上の併寫文獻から判斷し、いずれも十世紀文獻と見做す立場にあることをここに述べておく。

ここで、「頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔生天因緣變」の梗概を「功德意供養塔生天緣」に據って記しておく。

頻婆娑羅王は、佛に歸依し、塔寺を建立して禮拜していたが、息子である阿闍世と提婆達多により殺された。阿闍世は續いて父が建てた塔を禮拜供養することを禁ずる觸れを出した。しかし、七月十五日の僧自恣の日に、功德意という名の宮人が頻婆娑羅王の建てた塔を清掃して供養したため、阿闍世王の怒りを買った。功德意は阿闍世王の禁令を知りながら供養したと述べるとともに、頻婆娑羅王の統治が阿闍世王よりも優れていたと指摘したため、阿闍世王に殺される。しかし、死後は忉利天に生まれ、そこで佛に供養すると、光明が常の倍も輝いた。

第一章　“變”と題目——S.3491Vの題目とP.3051の擬題について

S.3491 と P.3051 の書誌情報は以下の通りである。

S.3491

Recto：①百行章一卷

①百行章一卷

首題：百行章一卷　杜正倫

尾題：缺

行數：251

Verso：①頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔生天因緣變②破魔變③『大方便佛報恩經』卷第一「孝養品第二」

①頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔生天因緣變

首題：頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔生天因緣變
中題：功德意供養塔生天緣（25 行目）
尾題：無
行數：49
②破魔變
首題：無
尾題：無
行數：172
③『大方便佛報恩經』卷第一「孝養品第二」
首題：無
行數：32
解說：寫本後缺。

P.3051
Recto：①頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔生天因緣變
①頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔生天因緣變
首題：無
尾題：無
行數：33
解說：寫本前缺。識語に「維大周廣順叁年癸丑歲肆月二十日三界寺禪僧法保自手寫紀。」とある。
Verso：①雜寫
①雜寫
首題：無
尾題：無
行數：6
解說：三界寺僧法寶が西州へ出使した際に記した僧戒德への貸借契約文書の草稿。ここにいう法寶とは紙表の識語に見える法保と同一人物であろう。

「頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔生天因緣變」は、S.3491V に記された第一の故事の首題であり、『撰集百緣經』卷第六「功德意供養塔生天緣」に取材した講唱體文獻である。P.3051 は眞題がないものの、やはり同じ「功德意供養塔生天緣」に取材している。そのため、王重民等編『敦煌變文集』[2]をはじめとし、今日に至るまで、S.3491V と P.3051 を併せて「頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔生天因緣

[2]人民文學出版社、1957 年。

變」と呼ばれ、一つの作品にまとめた翻刻が行われてきた。しかし、S.3491V と P.3051 は異なる寫本である。兩寫本を一つにまとめることの妥當性は、一度檢討されねばならない。ここではまず、S.3491V の題目によって兩文獻を併稱することの問題を考える。

まず、S.3491V は、首題に「頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔生天因緣變」とある一方、中題に「功德意供養塔生天緣」とある。首題と中題の間に書寫された内容は、押座文と府主太保の統治を讚える文句である[3]。實際に當該故事が始まるのは中題以降である。

その首題と中題を比較して問題となるのは、「變」の字を有するか否かである。この變が變文の意味であると解釋することには問題ないであろう。當該寫本の執筆者が「因緣變」という題目を冠したのか、それとももとになった寫本の題目を襲用したのかは不明だが、いずれであっても、當時 S.3491V に書寫された當該故事が、變文の一點として認知されていたことは間違いない。

それでは、變文の名が冠された S.3491V の首題を、P.3051 の擬題とすることは妥當なのであろうか。

P.3051 は、次章に見るように、出典文獻である『撰集百緣經』卷第六「功德意供養塔生天緣」の文章を多く襲用している。そこには經文が少しく書き換えられているとともに、變文文獻としての要素も二點認められる。一點目は講唱體であること、二點目は繪解きの詠いに由來する韻文導入表現が見られることである。

變文は、轉變と呼ばれる繪解きに由來する。その轉變が詠いと語りを織り交ぜたものであることは、轉變を詠んだ詩によって知られる。例えば中晩唐の詩人と思われる吉師老の「看蜀女轉昭君變」には次のようにあり、轉變が詠いを伴ったことが讀み取れる。

> 吉師老「看蜀女轉昭君變」[4]
> 妖姫未着石榴裙，自道家連錦水濆。檀口解知千載事，清詞堪嘆九秋文。
> 翠眉顰處楚邊月，畫卷開時塞外雲。說盡綺羅當日恨，昭君傳意向文君。

また、李賀「許公子鄭姫歌」[5]には、「長翻蜀紙卷明君，轉角含商破碧雲。」とあり、轉變が音樂性を有する聲音豐かな語りであったことを窺わせる。

變文が講唱體であることは、變文が轉變の流れを汲むことを明示している。なお、先行研究において、講唱體が變文としての必要條件でないことが、「舜子變文」

[3]ここにいう「府主太保」は、歸義軍節度使であった曹元忠を指す。榮新江『歸義軍史研究——唐宋時代敦煌歷史考索』、上海古籍出版社、2015 年、113–122 頁。

[4]韋穀編、傅璇琮點校『才調集』傅璇琮・陳尚君・徐俊編『唐人選唐詩新編（增訂本）』、中華書局、2014 年、1155 頁。

[5]李賀、呉企明箋注『李長吉歌詩編年箋注』（上册）、中華書局、2012 年、52–57 頁。

の文體考察を通して指摘されてきた[6]。その見解の妥當性は、他の研究者の間でも十分に認められており、筆者も贊同するところである[7]。しかし、それでも多くの變文文獻が講唱體であることを踏まえれば、P.3051 が講唱體であることは、變文として見做すための條件の一つを有していると言うことはできるであろう。

このことと關連するが、P.3051 を變文と認めるもう一つ目の特徵は、「……處，若爲陳說」という表現が使われていることである。これは、變文において散文から韻文へと移行する際に使われる韻文導入表現であり、轉變において、繪を聽衆に見せる際に使われた言葉の名殘りとされる。轉變が繪を見せながら行われたことは、上に引いた吉師老と李賀の詩にも明らかである。これが變文文獻の特徵的な表現であることも、既に多くの先行研究が指摘してきた通りである[8]。

以上の二點に着目すれば、P.3051 に「因緣變」の擬題を冠することは、一定の妥當性を有していると考えられる。

次に、「因緣變」という名稱の問題を取り上げる。

筆者は先の論考において、「金剛醜女緣」の五點の寫本（S.2114V、S.4511、P.2945V、P.3048、P.3592V）を比較考察し、唯一「變」の字が題目に冠された P.3048（首題：醜女緣起、尾題：醜變）が、他の四點に比して大幅な書き換えを經た文獻であることを明らかにした。それは、元來緣起類であった金剛醜女の故事が、書き換えを經た結果、新たに變文としても認識されるようになったことを示すものであった[9]。しかし、そのように書き換えを經たにも關わらず、P.3048 には、「……處，若爲陳說」等の繪解きに由來する韻文導入表現が一度も使われていない。このことはつまり、緣起類が新たに變文としての名を有するようになっても、繪解きの表現を必要としなかったことを意味している。「醜變」との題目が冠されながらも繪解きの表現を有しないことは、繪解きとは本來關わりのなかった緣起類と變文の境が曖昧になっていたことを窺わせる。これは、決して P.3048 にのみ見られることではない。例えば、P.2187「破魔變」は「當爾之時，道何言語」との韻文導入表現を用いており、繪畫との關係を示す韻文導入表現は用いられていない。

[6]金岡照光『敦煌の文學』、大藏出版、1971 年、110–113 頁。荒見泰史『敦煌講唱文學寫本研究』「總論部第三章・從舜子變文類寫本的改寫情況來探討五代講唱文學的演化」、中華書局、2010 年、90–113 頁。

[7]鄭阿財「從〈敦煌秘笈〉羽 39V 殘卷論〈舜子變〉的形成」朱鳳玉・汪娟編『張廣達先生八十華誕祝壽論文集』、新文豐出版公司、2010 年、745–768 頁。玄幸子「羽 039V を中心とした變文資料の再檢討」『敦煌寫本研究年報』第 5 號、2011 年、81–94 頁。

[8]Victor H. Mair, *T'ang Transformation Texts: A Study of the Buddhist Contribution to the Rise of Vernacular Fiction and Drama in China*, Harvard University Press, 1989. 金文京「中國の語り物文學——說唱文學」神奈川大學中國語學科編『中國通俗文藝への視座（新シノロジー・文學篇）』、東方書店、1998 年、85–124 頁。

[9]拙稿「「金剛醜女緣」寫本の基礎的研究」『敦煌寫本研究年報』第 5 號、2012 年、257–285 頁。

しかし、それはやはり「變」の眞題を有している。

それでは、S.3491V に殘る「因緣變」という名の由來は、どこまで明らかにできるのであろうか。實は、この考察には大きな障碍が横たわっている。それは、現在我々が知る二十點程度の變文から歸納し得る特徵に限界があるだけでなく、當時の人々の變文への認識にも變動があったと考えられるためである[10]。まず、S.3491V には、歸義軍節度使であった曹元忠の稱號が書寫されている。彼の節度使としての在位は、概ね九四四年から九七四年である[11]。よって、S.3491V は、十世紀半ば以降の書寫と考えて良いだろう。一方の P.3051 には、「維大周廣順叁年癸丑歲肆月二十日三界寺禪僧法保自手寫紀」との識語がある。「廣順叁年」は、九五三年である。當時 S.3491V に殘る「因緣變」という擬題が P.3051 に用いられていたと假定しても、他に緣起類と變文の繫がりを示す資料は、P.3048「醜女緣起（醜變）」に限られる。その紙背には「壬午年二月廿一日」とあり、ここにいう「壬牛年」は九八二年を指す[12]。つまり、十世紀半ば以降に變文と緣起類が交じり合っていたという事實以上の何かを引き出す具體的資料が、我々には與えられていないのである。このことを、我々の敦煌變文の理解の限界の一つとして押さえておきたい。

第二章　經典の敷衍方法

本章では、S.3491V と P.3051 の文章を、『撰集百緣經』卷第六「功德意供養塔生天緣」と比較することにより、それぞれどの程度經文を襲った文章であるのかを見ていくこととする。この作業が必要である所以は、P.3051 を變文と見做すことに一定の妥當性があるとはいえ、それが S.3491V と元來同一文獻であったかについては、別に問われるべき事柄であることによる。以下、それぞれの寫本の文章を「功德意供養塔生天緣」の文章と比較し、共通する文句をゴシック體で示す。

[10]「變文の意味するところは、時代によっても變化したであろうし、同時期にあってもある一定の範圍内でかなり恣意的に用いられたと考えられる。そしてそれは、樂府という言葉が、古民謡から詞、曲さらに演劇までも指すようになったことに見られるように、中國文學、特に俗文學の世界ではむしろふつうのことであった。變文もおそらくその例に漏れないであろう。」注 8 金文京「中國の語り物文學―說唱文學」、109-110 頁。

[11]注 3。

[12]注 9。

①『撰集百緣經』卷第六「功德意供養塔生天緣」と S.3491V

『撰集百緣經』卷第六「功德意供養塔生天緣」[13] 佛在王舍城迦蘭陀竹林。時彼頻婆娑羅王，每日三時，將諸官屬，往詣佛所，禮覲世尊。於其後時，年漸老大，身體轉重，不能日日故往禮拜。時諸官人啓白王言：「從佛世尊，索於髮爪，後宮之中，造立塔寺，於此禮拜，香花燈明而供養之。」時王然可。往詣佛所啓白，世尊即以髮爪，與頻婆娑羅王，於其宮內，造立塔寺，懸繒幡蓋，香花燈明，日三時供養。時王太子阿闍世共提婆達多，共爲陰謀，殺害父王，自立爲主，尋勅宮內：「不聽禮拜供養彼塔，有犯之者，罪在不請。」（以下略）
S.3491V「功德意供養塔生天因緣變」 過去久遠，往昔世時，我佛大慈，出興於世。遍遊三界，普化四生，開八萬甘露之門，柱四千塵勞之逕。時則有王舍大城頻婆娑羅王統渥（握）瞻部，紹繼黔黎，常以政法治國，不邪枉諸民衆。心行平等，遠近愍而腹生；意起寬慈，怨親慰同赤子。 ……中略…… 婆羅大王治黔黎，常生十善化群迷。於諸衆生普平等，感得時和內外清。七珍百寶無所乏，年支五稼有豐盈。人民歡喜皆稱嘆，諸天愛護讚神明。加以傾心敬三寶，不貪高貴世間榮。是時佛在山林內，三時就禮每精誠。大臣眷屬相隨從，往來途路步而行。請佛演說三乘教，普益一切諸衆生。 於是大王後乃漸漸老大，體重力微，難可故往於山林，日日三時而禮謁。然以端居寶殿，正念思惟，非分憂惶，忸怩反側。今若休罷禮拜，仗（伏）恐先願有違；若乃頂謁參承，力劣不能來往。即朝（詔）大臣眷屬，隱便商宜，中內有一智臣，出來白王一計：「佛有他心聖智，預知衆生心意。大王意欲參承，莫煩耳（爾）多憂慮。今日往於林中，佛前虔恭蹦跪。求請小（少）許髮爪，還宮敬造塔寺。安置佛之毫信，依此禮拜專志。共往山林之中，福分也合同比。」 時王取臣之計，遂往林中，即於佛前，求哀乞罪：「弟子不是懈怠輕慢

②『撰集百緣經』卷第六「功德意供養塔生天緣」と P.3051

『撰集百緣經』卷第六「功德意供養塔生天緣」[14] 爾時天子，向於帝釋，說此偈已，頂戴天冠，著諸瓔珞，莊嚴其身，將諸天衆各齎香花，下供養佛，光明普曜照于竹林，倍踰於常，前禮佛足，却坐一面。佛即爲其說四諦法，心開意解，得須陀洹果，即作是言：「自念我昔，積於白骨，過於須彌，涕泣雨淚，多於巨海，乾竭血肉，徒喪身命，今以得離。」作是語已，遶佛三匝，還于天宮。 時諸比丘，於其晨朝，白世尊言：「昨夜光明，殊倍於常，爲是帝釋梵天四天王乎？二十八部鬼神大將也？」佛告諸比丘：「亦非梵天鬼神大將，乃是頻婆娑羅王后宮婇女，名功德意，供養塔故，爲阿闍世王被害；命終生忉利天，來供養我，是彼光耳。」
P.3051「功德意供養塔生天因緣變」 （前缺）□大□諸瓔珞，莊□養佛□曜照于竹林，前□其說四諦法，心開意解，得須陀洹果。」爾時□道果，踊悅心懷，即於佛前，歡喜讚嘆： ……韻文省略（經文との一致箇所無し）…… 讚嘆佛已，復作是言：「自念我昔積於白骨，過於須彌；涕泣雨淚，多於巨海。乾竭血肉，徒喪身命，終無利益。我今於佛如來，隨生一念，一轉之間，得此妙果。超越輪迴，値人天逕。」作是語已，遶佛三匝，還歸天宮處，若爲陳說？

[13]『大正藏』第 4 卷、229 頁 c–230 頁 a。
[14]『大正藏』第 4 卷、230 頁 b。

……韻文省略（經文との一致箇所無し）……

［時諸比］丘，至明清旦，合掌向佛，白言世尊：「昨夜光明，倍踰於常。爲［是帝釋］梵天？爲是四天王子（乎）？ 廿八部鬼神大將也？ 令其夜分，照曜竹林。」諸比丘道：「□□光明倍尋常，照耀竹林及禪房。爲是上界天帝釋？ 爲是梵衆四天王？ □□佛會禪林内，能令夜分現禎祥。惟願世尊愍四衆，解說昨夜見底光。」

［佛告］諸比丘：「非是帝釋，亦非梵天鬼神大將，乃是頻婆娑羅王［后］宮綵女，名功德意，供養塔故，爲阿闍世王被害命終，生忉利天，今還下界，來供養我，是彼光耳。」佛道：汝等昨夜見底光，非是釋梵四天王。乃是王宮功德意，爲先捨命掃佛堂。被害命終生天上，還來下界至此方。執持香花供養我，令其夜分現禎祥。

（以下識語等略）

この比較から、S.3491V の經文の敷衍方法と P.3051 の經文の敷衍方法が大きく異なることが分かる。前者は經文に依據した文句が一部認められる程度であるのに對し、後者は散文部分がほぼ經文の引用よりなる。兩寫本の「功德意供養塔生天緣」との關係が異なるという事實からは、兩寫本が元來同一文獻ではなかったことが讀み取れる。つまり、我々は「功德意供養塔生天緣」を異なる方法によって敷衍した二つの變文文獻の存在を認めることができるのである。それはまた、本來異なる文獻を一つの作品としてまとめる從來の翻刻方法に對し、一つの問題提起ともなっているだろう。

ここで、P.3051 の特徵を考えてみたい。

變文や緣起類は、經文に忠實な文章で書かれることが少ない文獻である。例えば、先にも取り上げた「金剛醜女緣」は、『賢愚經』卷第二「波斯匿王女金剛緣品」をはじめとする幾つかの經典の故事とほぼ同一内容であるが、直接經文に依據した文句は無い。また、『賢愚經』卷第十「須達起精舍品」と同系統の故事である「降魔變文」も[15]、やはり直接經文に依據した文句は確認されない。

その一方で、非講唱體文獻に目を向けるならば、經文に多く依據した佛教因緣譚が確認される。その代表例として、BD03578 に書寫された「歌梨王割截忍辱仙人節節支解緣」と「慈力王以血餧五夜叉緣」の二點の因緣譚を擧げることができる。兩故事は『賢愚經』の經文を若干書き換えただけの文獻であり、故事の内容も獨自の展開を見せることはない。その指摘は既に先の拙論中に行ったが[16]、論の展開上、「慈力王以血餧五夜叉緣」を取り上げ、『賢愚經』卷第二「慈力王血施品」の經文との一致箇所を下線で示し、參考に供することとする。ここでは『賢愚經』の引用は控える。

[15]「降魔變文」の寫本には、S.4398、S.5511 ＋胡適舊藏本、P.4524（畫卷）、P.4615、傅斯年圖書館藏本 188107（羅振玉舊藏本）がある。

[16]拙稿「敦煌文獻 BD3578 初探——非講唱體緣起類と講經」荒川正晴・柴田幹夫編『シルクロードと近代日本の邂逅——西域古代資料と日本近代佛教』、勉誠出版、2016 年、229–257 頁。

BD03578「慈力王以血餧五夜叉緣」翻刻
慈力王以血餧五夜叉緣 過去無量不可思議微塵數劫，閻浮提界有大國王，號名慈力，領閻浮提八萬小國四千聚落，宮中有二萬夫人，殿下有一萬大臣。其王慈愍，以四等心，行十善道，化治群生。其諸人民，感王威化，無有災疫。國土豐饒，内外安樂。爾時一切人民之類，皆修十善，淨持齋戒，諸惡鬼，神不敢傷害。爾時一切食噉血肉羅刹、夜叉、又毒惡之輩，爲王教導，人行十善，不能取近傷害人民，皆受飢渴。有五夜叉來就王前，即白王言：「我等徒類，仰人血肉，存濟性命。今王教力不能取害。我等今者，命在須臾，求活無路。大王慈悲，何不救濟？」大王聞語，心懷哀愍，即自放脈，刺身五處。時五夜叉，各自持器，來承血飲，飲血飽滿，感頂王恩，歡喜無量。王立誓言：「我今以血，濟汝飢渴。後成佛時，當以法身戒定慧水，濟汝欲惱三毒渴愛。」時五夜叉既已飽足，念修十善，安置涅槃。那時慈力王者，今釋迦佛是也；五夜叉者，今憍陳［如］等五比丘是也。

「慈力王以血餧五夜叉緣」が『賢愚經』卷第二「慈力王血施品」の經文を襲用していることは、一見して明らかである。このように、BD03578を通して、多く經文に依據しながらも、一部を書き換えた非講唱體の講釋文獻の存在を認めることができる。しかし、現存する變文や緣起類のほとんどが、同系故事を佛教經典に求めることができるにも關わらず、直接の出典として經典に依據した痕蹟を見出すことは容易でない。恐らく、講唱體文獻には、直接佛教經典に據るものもあれば、當時廣く民間に浸透して語り繼がれていた經典と近しい故事に據るものもあり、また多少の創作を交えたもの等もあったであろう。從來の研究においては、講唱體文獻の自由な敷衍方法が多くの關心を惹いてきた一方、P.3051のように、經文に忠實なまま變文となった文獻も存在することは、あまり識者の關心の的とはならなかった。しかし、そのような文獻こそ、講唱體文獻の生成や發展過程を窺うにあたって貴重な資料なのではないだろうか。それは、これまで多くの識者が注目してきた自由な表現や白話語彙を用いた講唱體文獻が生み出されるにあたって、重要な役割を擔ったものであるだろう。

－作制者－

先行研究において、多くの講唱體文獻が、敦煌以外の地域で作成された可能性が指摘されてきた[17]。特に、講經文については、四川省から將來されたP.2292「維摩詰所說經講經文（擬）」や、九三三年に後唐・明宗（在位：九二六～九三三年）の應聖節に使われたP.3808V「長興四年中興殿應聖節講經文」等の資料がある。王昭君や目連の故事のように、中國各地で繪解きされていた故事に基づく變文も[18]、

[17]王重民『敦煌遺書論文集』「敦煌變文研究」、中華書局、1984年、175–227頁。橘千早『敦煌變文韻文考』、一橋大學大學院社會學研究科2009年提出博士論文、71–73頁（http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/17794（2021年11月20日アクセス））。

[18]注4、5。李遠「轉變人」（芳村弘道編『十抄詩・夾注名賢十抄詩』、汲古書院、2011年、45頁）、王建「觀蠻妓」（王宗堂校注『王建詩集校注』、中州古籍出版社、2006年、466頁）、孟棨等撰『本

やはり敦煌において變文として文獻化されたのではなく、他地域から傳來したものである可能性は高いだろう。

それでは、S.3491V と P.3051 はどうであろうか。前者には具體的な記述が殘されていないが、後者については、次の識語が參考になる。

> P.3051 識語
>
> 佛法寬廣，濟度無涯，至心求道，無不獲果。但保宣空門薄藝，梵宇荒才，經教不便（辨）於根源，論典罔知於底漠。輒陳短見，綴秘密之因由；不懼羞慚，緝甚深之緣喩。
>
> 維大周廣順參年癸丑歲肆月二十日三界寺禪僧法保自手寫紀。

この識語によれば、P.3051 の作成者も保宣と考えて良いだろう。保宣は、他の十世紀の敦煌文獻にも名前が確認されることから[19]、この變文が敦煌において作成された文獻であると分かる。ただし、それは「目連變文」や「降魔變文」のように、自由な語りを展開することはなく、ほぼ經文を襲用するものであった。よって、その作成は、決して特別な文章能力や知識を必要とするものではない。ここで着目されるのは、保宣がこの文獻を作成するにあたり、出典文獻の「功德意供養塔生天緣」には存在しない繪解きに基づく韻文導入表現（「……處，若爲陳說」）を用いたことである。本文のほとんどが「功德意供養塔生天緣」の經文を襲ったものである以上、ここに繪解きの表現を取り入れる必要があったとは考え難い。また、當時繪解きの表現を取り入れることなく變文と題された文獻があることも、先に見た通りである。このことが示しているのは、十世紀半ばの敦煌では、變文が廣く行われており、その表現が十分に浸透していたこと、またその需要も高まっており、既に變文と緣起類の境が曖昧になっていたことであるだろう。

第三章　「功德意供養塔生天緣」の流布と受容

變文や緣起類と關わりの深い佛教經典として第一に想起されるのは、『賢愚經』である。『賢愚經』は、歸義軍時代の敦煌において、一定の受容があった經典である[20]。しかし、「頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔生天因緣變」の出典文獻である『撰集百緣經』の敦煌における流布は、『賢愚經』と同じでない。敦煌文獻中におけるその寫本の殘存數のみならず、九、十世紀の經典收藏狀況を記錄した文獻か

事詩』（李學穎標點『本事詩；續本事詩；本事詞』、上海古籍出版社、1991 年、24 頁）等。

[19]李正宇「敦煌俗講僧保宣及其《通難致語》」『社科縱橫』1990 年第 6 期、34–38 頁。

[20]九世紀敦煌の佛教界を牽引した法成が『賢愚經』のチベット語譯を作成したことも、當時の『賢愚經』の受容を示すものであるだろう。

らも、『撰集百緣經』の廣泛な流布は認め難い[21]。それでは、なぜこの『撰集百緣經』の故事を出典とする講唱體文獻が敦煌文獻中に確認され、また敦煌で作成されたりしたのであろうか。『撰集百緣經』が『賢愚經』に同じく佛教因緣譚を多數收めていることや、『賢愚經』の故事をそのまま引き寫した故事が複數あり、兩經典の關係が深いことは確かである[22]。しかし、それだけでは、「功德意供養塔生天緣」が特に選ばれた理由として十分な說明にはならないだろう。ここで、「功德意供養塔生天緣」の內容から、當該故事が十世紀敦煌に流布した背景を探ってみたい。

・阿闍世と提婆達多が關わる故事であること

まず、我々が現在見ることのできるS.3491VとP.3051に殘る當該故事の內容を、冒頭に記した「功德意供養塔生天緣」の梗概と比較すると、S.3491Vには、頻婆娑羅王が佛に供養する冒頭場面が記述されており、P.3051には功德意が死後に佛を供養する後半の場面が記述されていることが分かる。つまり、功德意が阿闍世王の禁令を犯して塔を供養する場面は殘されていないのである。功德意の生前の行爲こそが當該故事の中心であることは、『撰集百緣經』における題目が「功德意供養塔生天緣」であること、及びS.3491Vの首題と中題からも知られる。これはつまり、現在我々には、當該故事の最も重要な場面が殘されていないことを意味する。筆者は、敦煌文獻が一〇〇二年頃の敦煌においてもはや使用されなくなった文獻群であると考えているが[23]、この立場より考えるならば、第十七窟に收藏されなかった中間部分は、なお廢棄されることなく保存され續けた可能性や、その一部が單行したり、他の寫本と貼り合わされ、利用された可能性を想定し得るであろう。

そして、提婆達多に唆された阿闍世王が父である頻婆娑羅王を殺害した故事は、『佛說觀無量壽經』によって、人口に膾炙していただろう。少なくとも、「功德意供養塔生天緣」の前提となる故事は周知であったと考えて良い。ここで我々の關心を惹くのが、S.3491Vの首題「頻婆娑羅王后宮綵女」の九字である。中題にはないこの九字が加筆された目的を考えるに、それは功德意が后宮の綵女であることを述べるのではなく、功德意が頻婆娑羅王の后宮の綵女であることを示すことにあったはずである。「頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔生天因緣變」とは、頻婆娑

[21]參照：方廣錩『敦煌佛教經錄輯校（上・下）』、江蘇古籍出版社 1997年。

[22]『國譯一切經』本緣部七「賢愚經解題」（執筆者：赤沼智善・西尾京雄）、大東出版社、1930年、61–65頁。出本充代「『撰集百緣經』の譯出年代について」『パーリ學佛教文化學』第8號、1995年、99–108頁。

[23]Fujieda Akira, “The Tun-huang Manuscripts”, *Essays on the Sources for Chinese History*, 1973, pp.120–128. 方廣錩「敦煌藏經洞封閉之謎」國家圖書館善本特藏部敦煌吐魯番學資料研究中心編『敦煌與絲路文化學術講座』第2輯、北京圖書館出版社、2005年、1–19頁。

羅王と阿闍世王と提婆達多の故事の一環として語ることのできた故事と考えられるだろう。そして、このことと關連して重要な點は、一國の王の佛教への歸依が讀み取れることである。

・國王が登場する故事であること

講唱體文獻の中でも、變文と緣起類は、各文獻が一箇の完結した故事となっている。それらの内容を讀み解くと、幾つかの傾向を指摘することができる。例えば、「目連變文」、「舜子變文」、「漢將王陵變」[24]等は、いずれも孝を主題とした故事である。また、「頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔生天因緣變」をはじめ、「金剛醜女緣」、P.2553「王昭君變文（擬）」、P.3375V ＋上圖 80 ／上圖 12「歡喜國王緣」、P.5019 ＋ BD11731 ＋ Dx11018「孟姜女變文（擬）」等は、女性が主要な登場人物であったり、重要な役割を擔ったりする故事である[25]。そして、「頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔生天因緣變」が他の變文や緣起類と共有するもう一つの特徵が、國王が關わる故事であることである。

先述の如く、S.3491V と P.3051 の文體の相違に着目することにより、當時の敦煌には功德意の故事を主題とする故事に對して、少なくとも二つの異なる講釋方法が存在していたことが明らかとなった。そのうち、大幅に書き換えられた S.3491V の文章の中では、頻婆娑羅王が「心行[26]平等，遠近愍而（如）腹生；意起寬慈，怨親慰同赤子。爲王賢善，風雨順時；年常之五穀豐饒，庫藏之珍財盈滿。」と稱えられている。これは、中國の皇帝の統治を稱える典型的な表現である。更に、同じ箇所において、頻婆娑羅王に對して「遂作在家弟子」という一句が加筆されている。これは、國王もまた在家者であることを強調するものであり、當該故事を在俗信者に向けて語る際に効果的な文句として加筆されたものと考えられる。このように、頻婆娑羅王の描寫が具體的になっていることは、當該故事を講釋として聞く聽衆やこの寫本の讀者に對し、その國王としての姿をより強く印象付けることになる。

また、頻婆娑羅王の佛教への歸依は、一國の王の佛教への歸依を意味する。當該故事の主題である功德意の行爲は、その國王の佛教への歸依を肯定するものである。功德意が頻婆娑羅王の塔を禮拜して供養する場面は、經典では「此塔乃是大王所造，今者坌汚，無人掃灑。我今此身分受刑戮，掃灑彼塔香花燈明而供養之。」[27]と描寫されている。功德意は阿闍世に殺されるものの、死後に忉利天へと生まれ、佛を供養する。その結末において、功德意の行爲が稱えられることは、國王の佛

[24]「王陵變文」の寫本には、S.5437、S.9946、P.3627 ＋ P.3867、北大 D188 ＋潘吉星舊藏本がある。

[25]荒見泰史「講史類變文とその空間」『軍記と語り物』第 48 號、2012 年、30–40 頁。

[26]「行」の下に一字有り。「平」の誤寫かと疑う。

[27]『大正藏』第 4 卷、230 頁 a。「分受」の二字、正倉院聖語藏本は「臨當」に作る。

教への歸依を、國の人々が支持することを肯定することでもある。我々が注意すべきは、このように間接的な形で國王が登場する變文や緣起類が、複數確認されることである。

まず、「降魔變文」では、舍利弗が勞度差に法術比べにおいて勝利した結果、國王とともに國民が佛教に歸依することになる。「金剛醜女緣」では、國王の娘である金剛が、佛へ懺悔禮拜して絶世の美女へと姿を變える。その後、國王が釋迦のもとを訪ね、金剛の因緣が說き明かされる。「歡喜國王緣」では、國王の愛妃であった有相が、死後に天女とともに下界の王のもとへ來て、八關齋戒を受けることや、現世に執着しないことを勸める。これらの故事において、國王は、決して故事の主人公ではないが、他の主要人物によって佛への尊崇の念を高めたり、佛教へ歸依したりする。中でも「降魔變文」と「金剛醜女緣」は、ともに多くの寫本を殘しており、その廣い受容を窺うことができる故事である。他にも、一國の王や一地方の統治者が關わる文獻として、「王昭君變文（擬）」、P.2962「張議潮變文（擬）」、P.3451「張淮深變文（擬）」等、多くを擧げることができる。

曹氏歸義軍時代と佛教が密接な關係にあったことは、既に多くの研究が指摘してきた通りであり、贅言を要さない。その繫がりは、曹氏政權にとってのみならず、佛教側にも必要とされたものであり、そのように政權と佛教が強い結びつきを有する社會が成立していた以上、國王を主題とする變文や緣起類等が多く作成されたことは、異とするものではないだろう。S.3491V の冒頭の曹元忠に對する文章には、「我府主太保千秋萬歲，永蔭龍沙，夫人松柏同貞，長承貴寵。城隍泰樂，五稼豐登，四塞澄清，狼煙罷驚，法輪常轉，佛日恆明。」とある。これは儀禮上の文句であり、當時の文範等に見られる定型表現を用いたに過ぎないことは確かである。しかし、別の角度から見るならば、このような歸義軍節度使を讚える儀禮文句を附す變文として、「頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔生天因緣變」が適切な故事と見做されたと解釋することもできる。

小結

本稿では、從來具體的な考察が進められていなかった「頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔生天因緣變」の二點の寫本を取り上げ、まず變文資料としての位置付けを行った。その結果、兩寫本には、經典の敷衍を自由に行うか經文に忠實であるかという點において大きな違いがあり、それぞれ由來が異なる文獻であることが明らかとなった。これは、從來の翻刻資料において、兩寫本を一つの文獻としてまとめてきたことの問題を浮かび上がらせた意義もあるだろう。次に、P.3051

が非講唱體の講釋文獻と近しい性格を有していることは、變文の成立を理解するにあたって、一つの重要な段階を示すものであった。また、國王が登場する故事である點等に着目することにより、他の多くの變文や緣起類とも共通する側面があることは、「頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔生天因緣變」に對して今後更なる研究の擴がりが見込まれることを示してもいよう。

ところで、敦煌變文は、繪解きを離れた寫本が多いだけでなく、既に讀み物化した寫本も少なくない。「降魔變文」や「王昭君變文（擬）」は、その代表的な寫本である[28]。寫本の用途とは、決して一通りではなく、讀み物化した寫本も講經に供することはできるのであり、また中途で寫本を斷ち、別の寫本に貼り繼いで新たに使用することもある。様々な用途が考えられる中にあって、現存する「頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔生天因緣變」の二點の寫本が、ともに講經との關係を窺わせることは、注目してよい。S.3491V は、他の佛教故事と併寫されているが、敦煌文獻において、佛教故事が併寫される場合は、それが講釋に用いられる文獻である場合が一般的である。一方の P.3051 は、識語に講經との關わりを讀み取ることができる。このことは、當該故事が決して識字能力を有する僧侶等にのみ受容された故事ではなかったことを示している。

最後に、當該故事のもう一つの特徵に言及しておきたい。頻婆娑羅王の建てた塔を功德意が供養した日は、七月十五日とされる。七月十五日は、夏安居の明ける日であり、目連故事の主題に關わる盂蘭盆會として、特別な節日であった。天成三年（九二八年）に盂蘭盆の道場が開かれたことについては、S.2575「爲籌辦七月十五日莊嚴道場啓（擬）」に「七月十五日應官巡寺，必須並借幡傘，莊嚴道場。」とあり、都僧統海晏より金光明寺や龍興寺をはじめとする諸寺へ幡や傘を準備するよう通達が出されている。現存する「頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔生天因緣變」の二點の寫本には、七月十五日であることを記す經文に對應する内容は殘されていない。しかし、「頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔生天因緣變」が、『撰集百緣經』卷第六「功德意供養塔生天緣」の經文を敷衍した文獻である以上、實際の講經の場でこの故事を扱う際に、盂蘭盆會に通じる話としても使われた可能性は想定し得る。『佛說觀無量壽經』とも盂蘭盆會とも繫がる内容であることは、當該故事の講經における獨自の泛用性を示すものでもあるだろう。

（作者は大谷大學文學部任期制助教）

[28]S.5511 ＋胡適舊藏本「降魔變文」の末尾には「或見不是處，有人讀者，即與政（正）着。」とある。また、「王昭君變文」には、「皇帝」の二字の上に空格が確認される（金文京「「王昭君變文」考」『中國文學報』第 55 册、1995 年、81–96 頁）。なお、空格は S.4398V「降魔變文」にも確認される。